

草津市立矢倉小学校通信 令和2年10月1日 NO.12



やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

任せられ、取り組むうちに

運動会が近づくにつれ、練習に熱が入っていく。とりわけリレーは練習の質と量が、着順という目に見えるかたちでの結果となる。そこでは一人ひとりの走力がどうかというよりも、むしろバトンパスがうまくできるかが決め手となってくる。このことが了解できるようになると、子どもたちは休み時間など、練習できる時間を見つけては、誘い合ってグラウンドに出るようになる。

私が担任していたときにもそれは起こった。子どもたちは「心を一つに！」と声だけは大きくかけあうものの、一部の子だけが寄り合い、やっていることは好き勝手なことばかりで、学級にまとまりは感じられなかった。ところが、本番が近づき、ああでもないこうでもない話し合い、声かけあって練習していくうちに、学級は生まれ変わっていったのだ。バトンを引き取るタイミングを見極めるために、全速力でやってくる仲間とぴったり呼吸を合わせようと繰り返しスタートダッシュに励むのである。それまで、いわゆる相手をけなす、さげすむといった、いわゆるきついことばがとびかっていたのが、はげまし、いたわるようなことばになっていくのである。体育の時間、私から、ためしにバトンパスの練習しよう、一度最初から最後まで通して走ってみようと、どれほど力を込めて促しても、なかなか満足のいく走り込みにならなかったにもかかわらず…。そんな子どもたちが、自分たちで声をかけあい誘い合うようになると全く別物となり、やりがい、おもしろみが手ごたえとして感じられていくのである。いわゆる体育の時間は、たいてい、どこかにやらされ感があり、自分のチームの着順が遅ければ、誰かのせい、何かのせいに行っていることが多かったことに気づかされた瞬間だ。

学ぶことの本来の姿は、任せられて取り組むうちに自分たちで手に入れていく営みのなかに生み出されるものと言っていい。これを子どもたちに教えられたエピソードだった。子どもにつかずはなれず、ずっと願いをかけつづけ、歩いていくことのよさはここにある。

今週末、土曜日は運動会だ。コロナ禍で制約を受けながら精一杯取り組んできた姿を見届けたい。

校長 大林道範